

## 非専門教育としての外国語教育

—ドイツ語授業実践の試み—

川崎医科大学 外国語教室

荒 井 隆

(平成 6 年 9 月 28 日受理)

Die Fremdsprachliche Erziehung als Nichtfachstudium

—Ein Versuch der Unterrichtspraxis in der Deutschen Sprache—

Takashi ARAI

*Department of Foreign Languages*

*Kawasaki Medical School,*

*Kurashiki, 701-01, Japan*

*(Received on September 28, 1994)*

### 概 要

大学設置基準が大幅に緩和され、各大学で教育改革が進行している。その改革にむけてきびしく問われているのが外国語教育とりわけ第2外国語である。そこで本稿では次のことを重点に取り上げて考察した。

まず(I)では、大学設置基準の大綱化について触れた。(II)では、本学の教育課程の改訂に伴う外国語科目の履修単位について述べ、第2外国語の受講者、ドイツ語教材についても言及した。(III)では、これまでのドイツ語授業の実践から試みた報告を中心に述べた。換言すれば、1年次の「文法学習」と2年次の「訳読方式学習」であり、さらに「対訳本を教材に取り入れた授業について」である。

### Resümee

Da sich das Hochschulrahmengesetz stark gelockert hat, wird an jeder Hochschule eine Bildungsreform durchgeführt. Die Reform des Fremdsprachenunterrichts-besonders der 2. Fremdsprache-unterliegt einer kritischen Fragestellung. In diesem Zusammenhang wurden folgende Punkte in Betrachtung gezogen: Unter 1. wurden die grundlegenden Prinzipien des Hochschulrahmengesetzes berührt. Unter 2. wurden im Zusammenhang mit der Verbesserung des Curriculums an der Kawasaki Medizinischen Hochschule die Punkteinheiten in den Fächern Fremdsprache erwähnt; außerdem wurde die Frage der Kursteilnehmer und jene des deutschen Lehrmaterials gestreift. Unter 3. wurde aus dem Versuch der bisherigen Unterrichtspraxis in der deutschen Sprache Bericht erstattet; anders ausgedrückt, verläuft der Unterricht wie folgt: "Grammatikunterricht" im 1. Jahr, "Lesen und Übersetzen" im 2. Jahr, außerdem "Gebrauch zweisprachiger Ausgaben".

## I はじめに

外国語教育の改善については、かなり久しくさまざまな論議を重ねてきたが、平成3年に大学設置基準の大綱化<sup>1)</sup>(自由化)によって大学教育改革への動きが、にわかに活発化してきた。新しい設置基準の狙いの一つは、非専門教育いわゆる一般教養(または一般教育)と専門教育の授業区分をなくし、総単位数だけを定めることにあった。これによって各大学が教育課程(カリキュラム)を自由に組めるように基準を大幅に簡素化したことである。

これに伴い外国語教育の在り方について検討を迫られることになった。そこで本稿では、本学医学部における外国語の履修単位に関するこれまでの経過とドイツ語授業の実践から試みた報告を中心に述べることにする。

## II 教育課程の改訂と外国語科目

本学の非専門教育(一般教養)としての外国語科目は、第1外国語が英語、第2外国語がドイツ語と義務づけられており、二カ国語を必須の科目として開設されてきた。

外国語科目には、大学設置基準に基づき単位制(実質上は学年制を採る)がしかれ、外国語は演習の単位<sup>2)</sup>と見做されている。

ちなみに旧設置基準<sup>3)</sup>では、大学の医学部の卒業の要件を次のように定めている。「大学に6年以上在学し、一般教育科目等を含め、64単位以上修得し、かつ別に定めるところにより専門教育科目を履修することとする。…外国語科目については、英語及びドイツ語をそれぞれ8単位、又は英語及びフランス語をそれぞれ8単位、合計16単位」とあり、それに対し新しい設置基準<sup>4)</sup>では、「大学に6年以上在学し、188単位以上修得するものとする。…」と改定された。細かな授業科目、例えば一般教育科目・外国語科目・保健体育科目・専門教育科目それぞれ〇単位の区分を廃止して、大枠を定めるだけにしたわけである。

本学医学部の授業科目及び履修単位は、これまでの基準に沿ったものであり、英語・8単位、ドイツ語・8単位、合計16単位が規定されている。昭和59年には、いままでの履修規程を見直し、以下のように一部改訂されることになった。

英語は、1年次6単位、2年次2単位、3年次2単位となり、履修年次が1年延びて2単位増加した。

ドイツ語は、単位数としては現行の8単位と変更ないものの、履修年次が2年に短縮された。つまりドイツ語は、1年次4単位、2年次2単位、3年次2単位から1年次4単位、2年次4単位となったのである。昭和61年からは、新カリキュラムどおり完全に移行し実施されてきた。

その一方で、平成5年に大学改革の一環として、さらに教育課程の改訂が行われた。すなわち、英語・8単位以上(10単位まで修得可能)とほかの外国語、つまりドイツ語・中国語・フランス語のうちから一カ国語・8単位との組み合わせにより、二カ国語を履修し、合計16単位以上、実際には18単位修得できるように配慮されている。学生の自主的な学習意欲をはかるため、Self Developed Learning<略称:S.D.L.<sup>5)</sup>>(自己啓発学習)の制度と第2外国語(ドイ



ツ語・中国語・フランス語)の選択必修制の導入にふみきったのであり、全学的な教育の活性化を目指すものであると言えよう。

### Ⅲ ドイツ語授業と文法・訳読方式学習

これらの制度改革にむけて、第2外国語(未修外国語)、ドイツ語教育に対する風当たりはますます強く、とりまく状況は以前よりもきびしい。

こうしたなかで、筆者の所属する医学部1、2年次のドイツ語授業の現状に関して若干ふれてみよう。

(1) まずドイツ語の受講者数は、ここ数年来、年度によって多少のバラツキがあったが、1年次、2年次ともそれぞれ2クラスに分割されて、1クラスが60人から70人程度である。

平成5年度から、未修外国語<sup>6)</sup>の選択必修制に伴い、学生に自由に選択させると、ドイツ語の受講者は、85人、中国語の受講者は、35人となった。ところが平成6年度は、受講者(1年次)の逆転現象が生じて、ドイツ語は、34人、中国語は、85人となり、ドイツ語離れがいつそう目立った。

(2) つぎに、ドイツ語の教材に関しては、例年新学期が迫ってくると、どんなテキストを使用するか、いささか気が重い。各出版社から毎年送られてくる新刊のテキストの数はかなり多い。テキストの選定には、教員自ら自由に選ぶが、重複を避けるために教員間で事前に連絡・相談したり、講義シラバスの作成の段階で確認して決めている。

受講する学生の側のニーズに応えながら、語学能力に応じた適切な教材を選ぶことは極めて当然のことである。しかし1年次後半から2年次への橋渡しのテキストを選定することは、なかなかむずかしい。テキストの中には、学習進度が緩やかではなく、急に高くなるものが少なくない。

また、いまのテキストには、カセット・テープ付きのものが多くから発音矯正の指導にも役立ち、たびたび利用してきた。そのうえ、視聴覚教材を適切に利用し、授業に組み入れることができれば、きわめて効果的であろう。

現在まで、筆者が使用してきたテキストをジャンル別に、以下列挙してみよう。

1年次：「初級文法」「初級文法読本」「初級読本」

「問題集」「作文」「総合教材」

2年次：「中級読本」「医学読本」「小説・童話」

「エッセー」「詩・リート」「Landeskunde」

(3) 授業では、1年次は前掲のように、文法を中心とした学習を行い、基礎学力の修得に力点を置いた授業を行ってきた。1年次で扱える主要項目は、次のとおりである。「冠詞・名詞・動詞現在／過去・人称／所有代名詞・前置詞・語順・複合時称・形容詞・分離動詞・話法の助動詞・関係代名詞」ここまでやりこなすのが限度で、あとの未習の項目は次年度に振りむけるを得ない。また文法講義<sup>7)</sup>のあとは、可能な限り Übungen に時間を割くようにしている。だ

が、近頃では「文法学習」はもう古い、あまり役に立っていないなどの議論があることも事実である。これから急速に国際化が進展するなかで、コミュニケーションを中心においた「実用性」を重視する授業を試みることは、もっとも必要なことである。けれども、「文法不要論」と一概には言い切れないのではないか。たしかに、文法は学んで面白い、楽しいとは言えないだろうが。しかしドイツ語を真剣に学べば、興味はつきないものだと思う。「文法書は、文芸書のような筋の展開があるわけではなく、決して読んでワクワクすることはない<sup>8)</sup>」というに対し、「日本語文法の話を読んで、文法とはこんなに面白いものだったかと目を開かれる思いをした<sup>9)</sup>」と、文法の面白さに気づかされることもあるようだ。いずれにしても、文法とはもともと多くの用例から抽出された公式を集積されたものであるが、文法の知識がなければ、正しく理解されるはずもなく、言語習得には不可欠なものと言えよう。

2年次は、前掲のように、主に訳読方式つまり講読を中心とした学習であり、読解力に力点をおいた授業を行ってきた。

訳読方式による学習は、上述の「文法学習」と同様に偏重学習の謗りを免れないが、ここ5年間、試行錯誤を重ねながら試みてきたのが、「対訳本」を教材に取り入れた授業である。

「対訳本」をテキストとして採用するか否か、はじめはひどく逡巡したが、結局使用することに決めた。

それはドイツ語の文章が平明かつ軽妙な筆致で書かれており、1年次の後期から2年次の学生に使用するテキストとして、もっとも適切なものと思えたからである。このテキストを用いることで、いままで講義中に見かける教師自ら訳した文を、学生がそのまま書き写す作業は全く見られず、習得すべき発音や語彙・文法規則などの項目に集中させることで、授業に変化を持たせることができるであろう。

このテキストの表題は、「Sabos Hemd<sup>10)</sup>」といい、六つの短編から成り立ち、ドイツ文と日本語訳が並列され、見開きになっている。以下、タイトルのみを掲げてみよう。

- 1) Sabos Hemd      2) Ein junger Mann, der die Heimat verließ
- 3) Ein junger Mann, der seine See aufgab      4) Amulett aus roter Wolle
- 5) Ein roter Parapluie      6) Sabo der Stotterer

本書は、著者が昭和52年、滞独中に独文で綴られた作品で、旧西ドイツで発表した。とくに東欧圏（旧東ドイツ、ポーランド、旧チェコスロバキア、旧ユーゴスラビア）の人々に多く読まれ、大きな反響を呼んだ。それを翻訳して「日独対訳」書として、昭和61年に国内で初版が刊行された。さらに1991年（平成3年）には、オーストリアのロックという国際文学雑誌<sup>11)</sup>に、著者の紹介記事と作品の中の一編“Ein junger Mann, der die Heimat verließ (Prosa)”の全文が掲載されたのである。その内容は、著者の体験と現実世界とのかかわりをもとに書かれたもので、いずれも短編ながら学生に深い感動を与えずにはおかないだろう。



終わりに、同書には語彙が約2000語使用されており、そのうち動詞が380語、使用頻度の高い基礎動詞<sup>12)</sup>が繰り返し出てくるので、学習者にとって記憶しやすい点が特長である。また、同書による語彙力のテストを不定期に行ったり、期末試験（三学期制）についても年3回施行されているが、問題の中に自由記述による感想文を書かせている。

学生からの感想文の紹介や授業評価に関しては、ここではふれず別の機会でも論じてみたい。

#### IV 結びにかえて

以上、きわめて粗描ながら教育課程の改訂に伴う外国語の履修単位とドイツ語授業の実践報告を述べてきたが、今後のために次の三点を指摘して稿を終えたい。

- 1) これからの大学教育・研究の活性化、充実のために、自己評価、学生による授業評価の必要性を認識し取り組まなければならない課題である。
- 2) ドイツ語の授業時間数の減少や自由選択制を導入されるなかで、もっとも効率的な方法である文法の重要性を見直す必要がある。
- 3) 外国語教育の多様化にむけて、未修外国語の選択肢を拡げる意味からフランス語を早期に開講されることを期待している。

#### 注および文献

- 1) 平成3年4月に学校教育法、同年6月に大学設置基準が改正され、同年7月に施行された。教育課程や教員組織の基本的枠組みを定める大学設置基準等の大綱化、大学等における自己点検・評価システムの導入などを行ったのである。  
教育行政資料調査センター：文部行政のすべて、1994、pp.513-517
- 2) 外国語の単位は、演習単位で週1回2時間を30週、すなわち1年間60時間の授業を行って2単位修得できる。従って週2回授業をすれば4単位となり、2年間で8単位修得することになる。  
近藤精造・吉田治：大学一般教養課程履修読本、蒼丘書林、1986、pp.124-136
- 3) 文部省大臣官房総務課：文部法令要覧、ぎょうせい、1976、pp.115-119
- 4) 文部省大臣官房総務課：文部法令要覧、ぎょうせい、1994、pp.252-257
- 5) SDL(自己啓発学習)導入の経緯とその実施概要について詳しく述べている。自己啓発学習(SDL)資料、1994
- 6) 従来の第1第2という枠を取り払い、単に「外国語」または「未修外国語」とした。フランス語は、教員異動のため現在開講されていない。
- 7) 荒井隆：初級ドイツ語文法練習ノート、西日本法規出版、1993
- 8) 在間進：詳解ドイツ語文法、大修館書店、1992
- 9) 佐々木瑞枝：外国語としての日本語、講談社現代新書、1994  
松本道介氏は、同書について毎日新聞「本と出会う一批評と紹介(2)」の書評で取り上げている。
- 10) 木戸三良：ザーボーのシャツ、日独対訳、荒井隆、木戸三良共訳、早稲田大学出版部、第3版、1994、pp.2-4、97-98
- 11) Log Zeitschrift für internationale Literatur: (Österreich) 1991、pp.23-24
- 12) 日本独文学会ドイツ語教授法委員会：ドイツ語重要動詞とその用例、郁文堂出版、第20版、1990  
大学でドイツ語を学ぶのに必要な基礎動詞など605語を厳選した動詞用例集であり、この対訳テキストのなかには、基礎動詞が大部分用いられている。